

2022年11月20日 礼拝説教要旨
詩編講解説教128「家族の祝福」
詩編128：1～6、ルカ2：41～52

詩編第128編は家庭内の平和と幸福について語られています。ルターはこの詩編を結婚の歌と呼びました。美しい家庭の風景がそこに見えるようです。しかし家庭内のことというのは極めてプライベートなことでもありますし、基本的にその家族にしか分からないことです。それゆえになかなか客観視できず、何が正しい家庭なのか、家族の在り方なのか、それは完全に個々の判断、価値観に委ねられてしまっています。今、世間を賑わせている宗教団体がありますが、その団体名には「家庭」という言葉が付いています。家庭ということだけを重んじてきたのでしょうか。でも実際は、悲しいことに多くの家庭が崩壊してしまっています。これは非常に象徴的なことだと思いますが、信仰が間違っているとそうなるということです。わたしは、これは決して他人事ではないと思います。本来ならば、家庭を祝福し、平和にするはずの信仰が、家族を壊してしまう要因にもなりうるということを心に留めておく必要があります。

聖書は最初からそのことを明らかにしています。創世記のアダムとエバの物語がそうです。アダムとエバの夫婦は神さまだけを見ていればそのままエデンで幸せに暮らせたはずでした。ところが誘惑を受けて罪が入りました。まことの神さまを捨てて自分が神になった。そこから家庭の崩壊が始まります。早速、責任転嫁、夫婦の間に亀裂が生じます。そして決定的なことはその息子たちです。カインとアベルは兄弟殺しにまで発展します。これが家庭崩壊でなくて何でしょう。神さまを見失った時点で家庭は壊れ始める。ということは、逆を言えば神さまを見失わなければ家庭は大丈夫だということです。でもここが難しいのです。どの家庭にも少なからず問題があります。結婚や家庭は本来、信仰的、霊的な事柄であるはずなのに、今では子どもや家族に伝道することすら「個人の自由」と言われればそれまでになってしまう。今、家庭は必ずしも愛を育む場所になっていません。加えて、今日、家族のあり方も多様になっています。だからこそ、聖書に立ち返って、そこからもう一度、家族のあり方を見つめ直すことが求められているのではないのでしょうか。

「あなたの手が労して得たものはすべてあなたの食べ物となる。あなたはいかに幸いなことか、いかに恵まれていることか」(2節)ここでは労働が言われますが、それに見合っただけの食べ物が与えられる。それが「いかに幸いなことか、いかに恵まれていることか」と言われます。働いた分、その報いとして食べ物を得るのは当然と思われるかもしれませんが、しかし聖書の時代は今よりもっと過酷でした。敵国による略奪などがあつたでしょうし、天候によって不作だったり、イナゴや病気などの病虫害の被害もありました。せっかくの実りを全部失うこともめずらしくない。働いて食べ物があるのは決して当たり前ではない。それは神さまが与えてくださった幸いであり恵みなのです。そこに思いを致すことができるか。そのことが問われています。

「妻は家の奥にいて、豊かな房をつけるぶどうの木。食卓を囲む子らは、オリーブの若木。」(3節)「妻は家の奥にいて」これは現代では少し誤解を与える表現かもしれません。「奥方」「奥様」という言葉に抵抗を感じる人もいるでしょう。でもここはそういう意味ではなく、「豊かな房をつけるぶどうの木」とありますように、これは多産を意味します。「家の奥にいる」というのは、垂れ幕で仕切った家の奥で出産したからです。また「食卓を囲む子らは、オリーブの若木」というのも、イザヤ書の11章「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの

若枝が育ち」をイメージされたらよいと思います。切り株の脇から若枝が伸びてくる。オリーブの木というのは実を多くつけますので、やはり多産の意味がありますが、ちょうど幹の根元から幾つものひこばえが伸びてくる様子です。オリーブの幹を若枝が囲むように、食卓を家族が囲む風景があります。しかしこのような一家の団欒の風景もそれは神さまが与えられる恵みです。先週の127編もそうでしたが、仕事や家庭は人間の力だけで築き上げられるものではない。その環境も出会いも神さまの導き、関わりがあるからこそ成り立つのです。誤解しないでいただきたいのは、これは独身だから恵みを受けていないとか、子どもが授からないから恵みを受けていないということではありません。独りでいることも、結婚すること、子どもを授かることもすべては神さまの恵みの選びのもとにあります。それが人生における「主の道」であり、そこに思いを致すことが重要であって、それがここに繰り返されています「主を畏れる」ことにつながっています。

「いかに幸いなことか、主を畏れ、主の道に歩む人よ」（1節）「見よ、主を畏れる人はこのように祝福される」（4節）主を畏れること、それが128編全体、つまり家庭内の平和と幸福を決定づけている信仰に他なりません。この神さまへの畏れを欠く時に、人間の思いが頭をもたげてきます。それが祝福を阻むのです。神さまを畏れるというのは、怖がることではありません。人生を「主の道」として受け入れ歩むことです。すべてを主が備えておられることを謙虚に受け入れる姿勢です。

今日はルカによる福音書第2章41以下を読みました。これは主イエスが家族と一緒にエルサレムに巡礼に行ったとき、少年イエスとその帰路、一人はぐれてしまったという話です。両親が心配して探したところ、少年イエスはエルサレムの神殿で学者たちと話をしておりました。マリアは怒って言います。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」（2：48）どの家庭にもあるような光景です。これに対して少年イエスは答えます。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」（2：49節）聞こえようによっては生意気な態度のように感じるかもしれません。でもここでマリアはこのことを心に納めておくのです。クリスマスの物語ではこのマリアの姿勢「心に納め、思い巡らす」ということが繰り返されます。反発するのではなく御心として受け止めるために、静かに心に納めていく。ここに神さまを畏れる姿勢があります。

来週からいよいよアドヴェントが始まります。キリストはまず何よりもわたしたちの家庭の中に生まれてくださり家族になってくださいました。それがクリスマスです。そのようにしてわたしたちが悩む家族の問題をご自身の問題として引き受けてくださいました。そしてご自身の命をもって神さまを畏れないわたしたちの罪を贖って十字架で死んでくださったのです。わたしたちが神さまを畏れ、主の道を歩む新しい命を生きるためです。この救いによって、家庭は祝福され、新しい「聖家族」となるのです。